Major G. m. b. H. 發行、Leipzig 1932 Juni）（內田）

●蒙古源流箋證

嘉興沈曾植箋證
錢唐張爾田校補

最近北平から蒙古源流箋證なる書物が出版された事を知つて直に手に入れて見た。原稿締切までに間がないので詳細に目を通す暇がない爲に簡單に紹介して置かうと思ふ。

この書の序文を見るに沈曾植氏の死後張爾田氏がこれに補註を加へ更に王國維氏の校訂本（王氏校訂本の事は集刊陳寅格氏の論文「蒙古源流の研究」中に見えたるも未だ閲讀の便なかりしもの今この書によりてこれをも併せ見る事を得るを喜ぶものである）を得てこれをも參照して居る樣である。

從來世に通行せる欽定蒙古源流が誤字脫漏甚しくして讀むに堪へない事は周知である（蒙文書社の譯註蒙古源流の刊行によつて幾分は補はれたるも）。さきに內藤博士が盛京文溯閣藏四庫全書本によつて校訂せられたる書物と欽定本のそれとを比較してその誤脫の餘りにも甚しいのに驚くのである。甚しきに到つては七八行の脫漏すらある程である。然るに此の度刊行されたる蒙古源流箋證は私の調べ得た限りに於ては內藤博士の校訂されたるものと殆んど一致して居る樣に思はれる。從つてこの書は略完全に近いものと思つて差支ないものと考へる。この書の出現によつて容易にかゝる完本に接する事が出來る樣になつたのは蒙古源流を讀むものにとつて大變な便宜と言はねばならぬ。その上蒙古源流に註を附して刊行されたのは本書を以つて

嚆矢とするであらう。

今試みに註の二三を見るに卷五に於いて問題の阿岱汗を明の記錄に見える阿台汗に阿魯克台を阿魯台に比定したる等は可ならんも（滿鮮地理歷史研究報告十二卷和田清氏「兀良哈三衞に關する研究」參照）額勒錐特穆爾に關して額勒錐卽明史之鬼力赤譯改郭勒齋者也などは如何であらうか。（同上參照）

一體漢譯の蒙古源流は蒙古語の原文から直接漢譯せるものに非ずして初め滿洲文に飜譯したるものを更に漢譯したるものなる事は蒙滿漢三體の文を比較すれば明である。而も漢譯は滿洲文を譯する事忠實であるが蒙文とは多少の出入がある（何れ詳細に發表の機會を有すると思ふから今省略する）。從つてこの蒙古源流箋證の註に於てこれ等蒙文の源流を參照したならばより以上啓發される所があつたであらうと思はれる。

要するにこの書は從來の欽定本の面目を一新したる點に於て又其の註を附せる點（註に關しては尙檢討を要するは勿論なれども）に於て苟も蒙古史研究者は一書を備へて然るべきものと信ずる。（京都彙文堂取次）（山本）

●福岡縣史資料　第一輯

福岡縣立圖書館長伊東尾四郞氏が縣の囑託を受けて蒐集編次せるもの。まづ卷頭に參考書目を擧げその主なるものに就いて解題して後、神代以後持統朝までの史料を編年體に揭げ、次で有名な宗像の一筆一切經、五條家文書等中世の史料を載せ、轉

じて近世久留米、柳河、福岡、秋月、小倉等諸藩の史料をその據るところの原形に從つて或は編年體に或は志表の體に集め最後に明治初年の縣治史料を添へてゐる。かくてその收錄するところは、國夫々獨立の史料ではあるがまた全編を通讀すれば自ら縣史沿革の概要を知るを得しむるやう心せられたものゝ如くである。從つて例へば五條家文書に就いても現存三百數十通全部を載せることをなさず就中特に重要なる史實に關係あるものゝみを選んで之を年代の順に配し、その內容關係事蹟に就いて簡單なる解說を加へ、また近世「筑前國田畠之高村々指出前之帳（金吾中納言殿の時之分）」、「人畜御改帳（元和八年）」等の記錄を收めるにも之を「天正年間筑前各郡村田畠高」、或は「元和八年豐前の戶口調査」等と題して之を現今の統計表の如き形に整理して一覽相互の比較を容易ならしむる樣の方法を用ひてゐる。

惟ふに近時鄕土主義の唱導流行と相俟つて地方に於いて縣史郡史等の編纂されるものはその數極めて多い。然もその採る所の方法體例等に於いては未だ容易に以て一般の準據とするに足るが如きものを見出しえないやうである。或は古き地方誌の型式を守つて地理、政治、經濟、敎育、風俗等諸の編の中に强ひて關係事項を拾ひ集め、或はまた偶然なる史料の存否に左右されて敍述輕重簡繁の當を失するものが多い。而してかゝる困難を知るものは寧ろ資料そのものゝ蒐集と整理とを以て姑く編纂に代へようとする。今、本縣史資料はこの第三の道を採るものといふべく、またその地方の事情に勘へて然るべきことと思はれる。たゞ本書が「古代よりも近代に重きを置き治亂興亡に關する資料よりも民政に關する資料を多く採錄」することを主旨としたが爲とはいへ、この縣が特に他のいづれの縣とも異つてその誇とすべく、我々も亦最も關心を寄せる所の、大宰府を中とせる時代に就いて殆ど何等の重要なる史料をも載せてゐないのは如何であらうか。考古學的資料は姑く之をおくとするも文獻上の資料は努めて之を網羅する樣ありたく、少くとも古代編年史料を何が故に持統朝にとゞめて之を六國史の全時代にまで及ぼさなかつたかは洵に了解し難いところである。また中世に於ても元寇に關する史料の如き必ずしもたゞ治亂興亡に關する事項とのみは言ひ難いであらう。尤もそれらはいづれも第二輯以下に於いて當然採收せられようことゝは察せられるが、官廳の事業として調査や蒐集の上に特に多くの便宜を有せられるのであるから、特に包括的にして偏倚なきを期せられたいと思ふ菊判八〇五頁、圖版三葉、地圖三葉、福岡縣庶務課發行、定價金五圓）（柴田）

●京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告　第十二冊

京都府史蹟勝地保存委員會の昭和五・六兩年度の調査の成果を公表せるもの、史蹟の部は、京都市「清和院」、乙訓郡「羽束師川」、綴喜郡「東車塚庭園・山瀧寺遺蹟」、加佐郡「桂林寺」、與謝郡「禪海寺・日吉神社と天長寺」、熊野郡「迎接寺」、京都市祇